

# 眞生

第二卷六月號

- 何事も自分の都合からばかり割出して此の世を見れば先方の意に充たぬことも多いであらう。
- さればとて先方の都合からばかり一切を割り出しては又自分の方の立たないことも多いであらう。
- さればとて、自分の都合と先方の都合とを考へて五分々々の道を考ふるも何となく、一つのものが半分になつたかの心がする。
- されば此の外には吾人のとるべき道はないのかそこには只全一の世界がある。
- 全一の世界は自他の區別がない、自が他となり、他が自となるの世界である。而して二が四となり四が十六となるの世界である。
- 自他各一を守つて、他に融せざれば二は併せて二となるに過ぎぬ。乍然自他が各一を合すれば自他共に二を得て、併せて四となるの世界がある。
- そこに合同の眞理があり、そこに相互扶助の天國がある。而て全一の世界は此の理想の無限大の世界である。
- 愛する友よ、私共は人類こせつて此の全一の理想に生きやうではないか。そこには一切の争いは止みそこには無限の慈愛輝く。(念)

# 信仰の實事に生きよ

## 目次

- 信仰の事實に生きよ  
土屋 觀道
- 見佛の理想と人類の生活  
土屋 觀道
- 懺悔録  
演 阿彌
- 借金してゐる心持  
中野 尠子
- 編輯余白  
大野 顯道

### 「祈」

▲佛教の概念をいくら束になる程拾ひ集めても要するに(概念に)すぎない、釋尊の生涯を一場のパノラマの様に心得て賛歎したり三十有餘年の苦惱と健闘の中に生道を求めた法然上人の求道生活の記録をセンチメンタルデカニズムの芝居の様に見流して行かうとする輩と同じだ。▲そして主觀的な自己生活の内容には一時的な眠け醒しとして残るばかりだ。

▲佛教の佛敎だ、と追ひ廻して居るよりも自分の生活の事實にたつた一度の眞剣な祈りを捧げ得る事が出来るならば其方が余程愛と力とを感じ佛敎の本義を體得するに近途である。

▲祈り得る者は幸だ、祈りは生活を統一し純化して行く。▲祈りを自己の生命の中に見出してゐる者には見えざる力の所有者が人間が安價に評價してゐるものではない、内面に輝く生の力を實感して行く者は只祈る人その人のみの世界であり如來のみの知り給ふ所である。

▲「あの人の信仰は……」などと人間の理解、評價は餘りに外面的であり錯誤が多過ぎる、生を眞實に把握し如來を眞に祈り得るものは消極的の相に見える奥にもつと深いが積極的な力が見えそんでゐる、恰も眠つてゐる小兒の相が積極的な様に見える。而も内面に不斷に生育へと燃えてゐる積極的な祈りがある様に。

▲不離佛の祈り、それは祈りつゝある人の實感であり内生命である。(顯)

▲料理の講義録を讀んでも料理の味は出て來ぬ。調理法を聞いてゐるより不味い料理でも口へ入れて呉れ。

▲信仰なんて讀んだ丈けで字の間から滲いて來るもんぢやない、聞かして貰つて腹にも溜らぬ、宗教の聞思修の三つが揃はなさや生きて來ない、信と行とがカチリと合て火花が出る。見て聞て考へても解らぬ處が食て初めて解る。喰てから如何様にも説明は出來る、ウマイと云ふ瞬間は説明も出來ぬ一大事實なんだ。

▲宗教は智識でも概念でも無く、此ウマイと云ふ事實そのものだ、選擇集を破ても元祖は消えぬ、法然の口から念佛を封しても法然は死なぬ、そこに言葉や文字を離れて生命がある。一度喰つた味は頭を拊つても忘れさせられぬ。そこに不滅の強さがある、それが信仰だ。

▲南無阿彌陀佛と全身を傾倒して彌陀に凭たれ懸た時、何人が來ても二人を引裂く事は出來ぬ、一つとなつた二人は殺しても二つには離れぬ。そこに無限の生命あり、不畏不壞の存在がある、それを救はれたとも獲信とも云ふ。

▲否や、救ふものも救はれた者も無く唯念佛のみが光てゐる。此一大事實こそ佛が出世した本懷であり、凡夫に望みありとする所以である。目に見えぬ二つの電氣が感應した時落雷と云ふ一大事實が現出する、二極を離れてものを燎く力である。一切物一切人を生かす救済である。

▲其救済と云ふのも何だか阿彌陀様とか云ふ方が有て何んでも斯うした罪深い者を救て下さるげな、そう云へばそんな氣もぜぬ事も無いが、多分そうだらうなと云ふ位いな程度で、悉皆り信心を戴いたと思つて安つぽいお救ひでもない。

▲突き詰めて突詰めて、疑て疑て最後まで切り込んだ時、疑ひ切れぬが自分の力で何うともならぬと云ふ嘆きの地獄である。その時ポーンと抛り出して今迄頼りにしてゐた小さい力を捨てた時、初めて絶大なる如來の恩寵に觸れる、難信難行は他力易行の事だ。

▲佛や凡夫を詮議立てしてゐる事はない、此事實そのものを掘れ。(尠子)

## 見佛の理想と人類の生活

土屋觀道

噫、見佛の理想、想へば身も慄るう感じがする。昔は見佛は愚か、未だ佛を信ずるといふことさへなかりし私が今や見佛は愚か見佛の理想にまで生きやうとすることは未だ此の妙境を知らざる人々にとつては狂氣の沙汰とも思ふてあらう。乍然、昔私が佛の實在さへ疑ひし時のありしことの事實なりしが如く、今日の私としては見佛の理想に憧れ、見佛の理想に生きやうとすることは正に夫よりも確かなる事實である。

然らば見佛とは何を意味するか、見佛の理想とは如何。而して此の問題や正に宗教の中心であり、又宗教の根本である。されは同じく見佛と云ふと雖も其の見佛といふことに對しては眞實の佛を見ることなるが、未だ佛の實在さへ信ずることのできぬものに佛を見ることができぬであらうか、而て佛とは我等の力にて見得べきものであらうか、夫れとも、佛とは本來見らるべきものであらうか。乍然、佛とは如何なるものを云ふかとは一寸普通の常識では考へることのできない問題である。少くとも神の世や佛の世界は所謂普通私共の經驗してゐるところの眼耳鼻舌身意の對象となることのできない世界であつて、是等の五感六識の經驗範圍を以て神や佛を見やうとすることは到底不可能のものであるが故に夫等の世界より外に經驗も無く、又夫等以外の世界を要求する心の起らない人々には神の世界や佛の世界が信せ

られず、反て否定せられやうとするのも亦無理からぬことである。然らば如何にして佛を見得るか、我等は此の世に於て此の五感の作用以外の感覺の作用ありや、又此の五感の作用にて知り得る世界の外に、五感の作用以外の作用に於て知見し得る處の世界があるか。然り、確かにと私は謂得るのである。或人は言ふかも知れぬ、夫れは汝の誤認でないか、自からさうあり得るといふのは其の實夫れがあるのではないものを汝自身にさう思ふのであつて、夫れは嘗て五感の作用によつて得來たれるものの中に於て、自から記憶に残れるものを或る何にかの期會に於て想像し、連想し若は無意的に復現し自ら之を知らずして恰かも夫れを眞實實在せるものかの如く思ひなしてゐる事柄に過ぎないかと云ふ人もないとも限らぬ。乍然、夫等のことに就ては私自身に於て已に充分に反省した上でのことであり、少くとも夫等の心的現象に於ては初めより之を肯定して而かも夫れ以外に於て確かに吾人の本心の要求する所の絶對不變の一大靈界の實在せることを私共は否むことの出來ないことを直觀してゐるのであつて、之等は決して單なる五感の作用を以て知る位いな確かさではないのである。而て尙夫れよりも根本的に確實的に而かも常性的に信賴することの出來るところの神秘の實感の世界である。斯く云へば普通の人々は餘りに私の言葉を變に思ふかも知れぬ、乍然、私共が之こそと確實なものとして信することのできるものも、果してどこまで夫れが眞實にして而も動かない所の確實の常住性を以つてゐるのであらうか、從令夫れが悉く自己の實驗に依るものとするも、而て夫れが悉く客觀的に常住不變の科學的根據を有せりとするも、果して夫れがどれだけの眞實性と確實さとを私共に持ち來たすであらう。尤も私共は自己の經驗を経たものほど確かなものはないと思ひ又夫れを根本から無視しては凡そ何を信じてよいかと云ふ

ことさへ成立せないことになる。乍然、凡そ如何なるものといへども、一度私共の認識の世界に其の存在を認められたる限り之を其の人に於ける其の當時の實在として心理學的には認めざるを得ざるものがあり、又如何なる科學的知識と雖も一度はこの人類の認識の上に現れたものでないものは無いのであるから、之を最密に云ふならば凡そ今日の科學的知識と雖人の認識作用か如何なる場合にも絶対に正確であると斷言し得ない限り、果してそれが認識した通りのものであるか否やといふふとはそんなに確實的に斷言することはできないことである。故に況て、心理的事實以外に渡つて之を斯くの如しと推論斷定するが如きは更らに當を得たものとはいへないと云ふことも云へると思ふ。乍然、又一方には吾人の心理作用といふものが唯單に五感の作用のみによつて現はれるといふべきかと云ふに必ずしもさうとばかりはいへない點もあるではないか、何者其の五感の作用の起る以前に於て之を起さしむる所の何ものかが其の前に若は其の外に存在しないと云へるであらうか。少くとも今一つの心的現象、若は物的現象に於て其の依つて來る所を考察すれば、必ずそこには時間と空間とに度つて因縁、因果の干係のあることを發見し、尙私共が事物、並に心的作用の認識状態に入るに於て、認識以前の根本状態に心を傾け來る時、私共はそこに認識以前の自己の本體について、何等かの深き暗示を其の中に直觀することを禁ずることが出來ないではないか。大にしては宇宙の根源、萬象の根本に渡つて其の生滅、起滅の起原を辿り、小にしては自己内心其のものの存在より心的作用の根本中心の自我の本體を直視しやうとすることまで、多くは認識の範圍を出でぬ。而して、之は必ずしも五感の作用によつて知りうる所のものばかりともいへないではないか。否寧ろ此の五感の働きの是によつて起るといふ其の根本及其の考への起る其の考へ

の働きの未だ起らざる以前の當體までも之を知らうとする問題は決して普の知覺を以つて知りうべき所のものではない。而て吾人は夫ればかりではない、更らに進んでは自己其のものの生存を此の宇宙の本體に認め、此の自己をして更らに將來に於て如何に生く可きかと、單なる十年百年の人生にあらずして、永劫に盡きせぬ宇宙と共に不滅ならしめ、一切の萬法と共に無窮に價値あらしめたいと願ふのである。神の世界が如何なる世界であるか、佛の世界が如何なる世界であるかはよし知らないとしても、神の世界が如何なる世界であるか、佛の世界が如何なる世界であらねばならぬかと云ふことを考へざるを得ざるに至るは眞に生さんとする人々の正に來るべき自然の姿ではないか。かくて、自ら吾人の要求は神の世界、佛の世界を思念せずしては眞に生きることが出來ないやうになつて來るのである。恰も夫れは吾人が實際生活に於て初めのほどは自己の目にふれ、手にふれるもののみを欲求の上に充たしたものが、其の幾度かの經驗は必ずしも夫れが悉く我が思ふやうになるものにあらずして、そこには一定不變の道理があつて、此の道理に従つて之を扱ふ時、其の事が我が欲求に應ずることを無意的にも又意識的にも知覺して來るに至り、次には此の道に従つて其の自己の望みを達せんとして其の道理を意識的に發見し、是認するに至るが如く、神と佛との實在も、我等の生活の本質を反省し、眞に意義ある生活として、永劫不死の要求と無限向上の要求とは單なる肉的生活や、名譽財産の上のみでは飽き足らず、神の世界佛の世界を憧憬せずには居らなくなるのである。而して佛の世界はそこに開かれ、人生の意義はそこに示されて永遠の生命と價値の世界とがそこに顯はて來る。而して、是等の要求の充される所として、吾人の要求は遂に不死の世界、極樂の世界として現代をも超越したる神の世界、佛の世界といふものを僅

れて來るのである。

而して、神の國、佛の世界とは夫ればかりでない、一度頭を回らせば、我等の生命の現はれを直視し、世界萬象の顯はれを直觀するに、一切は宇宙の現はれ、宇宙現象の一大活動にして、悉くこれ一切生命の躍動、躍進の姿である。そこには天體の運行、四季の行事も時を違へず、山川草木離獸虫魚一として時と處を得ざるはない中には弱肉強食、生存競争の悲惨の世界もないが、尙靜かに之等の上に吹き來る人類生活の中心を直視すれば、そこには限りなき人類の要求として、永遠の生命を無限向上の神の世界を望んでやまぬ願がある。

乍然斯くの如き神の世界は一朝一夕にして來たるものではない、吾人はともすれば肉慾の奴隸ともなり、或は色慾の奴隸ともなる。中には食ふ爲めにのみ働いて而も一生働きに働いても未だ一日の生活にさへ眞實の安定も得られずして一生を終るあり、或は病苦の惱みに心とさされて未だ夢にたに神佛の世界を知らず、或は徒らに酒肉の友となり性慾の巷に其の身を亡ぼし、或は失戀の惱に捕はれ、或は愛なき夫婦の虚偽に苦しむ。たまたま財あれば財あるに惱み、たまたま子あれば子あるに惱む、其他名譽は捕はれては苦樂常なく、相恨み相憎む、中に邪智憍慢の輩あり、悲苦狭量の小人あり、而して永くもあらぬ此の人生を是等の事柄に捕はれて、眞實の自己を視つむるに暇もない。斯くの如きの徒輩、如何にか眞實の自己を知り、如何にか永生の永生の世界を知らん。然乍ら、靜かに自己の過ぎにし昔を考ふれば自分も昔を考ふれば自分も昔は夫れてあつたのだ。思へば身の毛もよだつ人生の地獄である。オウ私のなつかしき友人よ、私共は果して毎日如何なる人生の生活をば爲せりとなすか。世に所謂、其日暮

しといふことあり。されど私共の生活か即ち夫れで無ければよい。永生の光り君見ずや、無限の向上君知らずや、世には單なる肉慾の世界のみが世界ではない。又單なる財慾の世界のみが世界でもない。況んや毀譽褒貶の世界のみが世界ではない。視よ、眞實の世界を、聽け、眞實の叫びを、そこには永劫に滅びざる靈の世界があり、そこには無窮に盡きざる愛の世界がある。宇宙の眞理と宇宙の審秘とを辿り行くところ、そこには永劫に盡きせぬ至善至美の佛の世界が輝いてゐる。一度是の門に入るものは永劫に盡きせぬ如來の慈光に蘇生り、永遠の生命を無限の向上とは忽然として展開し、如來の御姿は嚴然として現はれて來るのである。斯くて吾人は佛の上に宇宙を見、宇宙の上に佛を見る。そこには佛として佛のあまさぬところもない。

乍然、夫れも亦見る人によつて異なるであらう、否、少くとも私の信仰の經驗によれば、自己の信仰の程度に依つて、其の佛を見ることの深さにも亦、無量無限の深さがある。例へば唯單なる一人の人を見るといふことも、其の見る人の見やうによつては更らに無限の深さがあらう。夫れと等しく同じ佛を見るといふ中にも各々其の人の信仰の程度より、其の佛を見るといふことも亦無限の程度あるといふ可きである。

然り而して、今私の言はんとするところの見佛は如何なる意味での見佛であらうか。同じ見佛の理想と雖も、其の人の信仰の程度によつて亦其の程度も無限である。乍然、若し之を一般的に云ふならば、其の人に於ける機根に相應する目下相應の理想と、更らに進んでは其の人に於ける最高至善の究竟見佛とが理想として立てられる。而して前者は目下吾人の最急なるの要求であつて實踐門に屬し、後者は吾

人の究極理想であつて理想門とも言ふべきか、乍然、此の二者は初めより二門あるのではなくて、後者の理想が第一にあつて、實踐の理想が現實の上にあるといふべきである。所詮は一なるものに歸し、本來二つのものでない。

然らば最高に於ける理想の見佛は何であるが、夫れは他でもない、新しく云ふ自己自身の上に各自が佛を見ることである。換言すれば宇宙の本體の上に佛を見ると共に、又一切萬象の上にも佛を見る、而て釋迦、孔子、キリストの如き偉人の上にも佛を見る許りでなく、更らに進んでは自己自身の生活の上にも神を見、佛を見ることである。而して、自己自身の上に神を見、佛を見るとは如何なることを意味するか、夫れは即ち、自分自身が釋迦や孔子、キリストの如く、神に生き、佛に生きるとを見るのである。友よ、斯くの如きは一見、他より見ればさながら誇大妄想狂の如くにも見えるであらう。さうして又、所謂、世間の佛敎を聞き訓れた人々にはあまりにあたり前の言葉の如くにも聞えるであらう。乍然、これはこれ實に私にとつては人類生活の一大革命であつて、人類生活の眞義に目醒めたるもの、自から獲ざれば止まざる、根本要求である。所謂、佛敎の成正覺の理想であつて、即、覺佛の體現である。神の生活、佛の生活、そのものであつて、人類生活の眞義は此の理想を外にして何ものも無いのである。

然らば、神の生活とは何ぞや、佛の生活とは何であるかといへば、夫れは自己が宇宙と一體なり、宇宙の本心を如實に直視して、此の直觀の上に映じたる宇宙の本心を自己の時處位に體現するにある。求道も、入信も、修道も、體現も、要するに如來を中心として眞實に生きんとする人類向上の楷程に外ならぬ。

乍然、斯の如き最高の理想がどうして私共の心の上に現はれて來るのであるか、夫れを佛性の發現といふ。恰も歲頃の青年男女が我知らず、そこに限り無き性慾の衝動を感じては、戀愛至上の憧憬を禁ぶ得ざるが如く、人一度人類生存の眞義に目醒めては自から永遠の生命と無限向上との世界を憧憬して止まざるに至るのである。而して神の世界とはこの自己本心の憧憬の世界であり、佛の世界とはこの自己本心の理想の世界であつたのだと云ふことにもなるのである。而かもそこには一切を超越して一切の中に内在せる自己の本源にして又萬法の主體たる宇宙の本覺を見る。而して是の佛や絶對にして時空を絶し影もなく又形もない、而も了々として古今を貫き十方に連なる如來は宇宙の全一であり萬象の根源であり、中心であり、歸趣である。故に、如來を離れて我あるにあらず、我を離れて又如來あるではない。如來と我とは不離であり。不二である。

乍然、世の多くの人々は未だ嘗て眞の如來を知らず又自らの眞實の自己をも知らずしてともすれば、時處位に變り行く萬象の影のみを捉んでゐる。故に日夜に消え行く此の肉身をのみ自分だと思つてゐる。乍然、よく思へ、此の肉身が眞實の自分ではないことを、此の肉身をして肉身たらしむるものは何ぞや、而して斯く考ふるものは誰れぞや、肉身となり心の働きたる其の主體を直視せよ、是、肉身と此の心の働きたるが如何なる所より働きをなせるかを反省すべし。而て靜かに一切を望むれば、そこには限りなき自己の生命と向上の發露とが永遠の生命と無限の向上を要求し、あらゆる私利と私慾との日夜に盡せぬ闘争の中よりもそこには限りなき如來の慈光を懂かれる人類の望みが無窮に輝いてゐるのを見る。

オウ、なづかしき我が同朋よ、私共はいつもかくの如きの向上一路に立つてゐるではないか。唯如事

にすべきかの眞實の大道が智慧たらずして知らぬばかりである。故に無限の同情を以つて之等一切の生活直視すれば、そこには實に厭ふべき悲しみも、又憎むべき何物もなく、そこには眞に愛すべく喜ぶべき楽しむべき人類向上の光を見る。而して、其の光りは又念佛を通して如來の大悲と變つて來る。一切は宇宙の顯はれ、宇宙全一なる如來の大悲である。悲しみも喜びも一切は如來の恵みである。乍然、力なき我等にはそれが悲しみであり、惱みであり、絶望であると見へるかも知れぬ。否現に私にも昔はそんなに見えたのであつた。乍然、自分たちいつまでもさうであることは出來ないのである。道に惱める處の人々よ諸君も、夫れではあり得ぬであらう。而し若しも吾々がその絶望を絶望としてありうるならば、そこには何等の惱みも無いことになる。そして又其の絶望となりへぬところ、そこに私共の惱みもあるではないか、乍然、此の惱みこそ、即、絶望を絶望として捨て得ぬ自己の事實であつて、而も又如來に南無する唯一の力とある。實に永遠の生命も求め得られず。無限の向上も求めて來らずば、罪と死と汚れに悩むもの、苦しみは幾何であらう。而て、如來を信せず、神を見ることの出來ない人類の生活は一切が皆悉く死と罪と惱みの生活である。而も神にも生き、佛に生き、神として立ち、佛として生きんこと、其の人の理想愈高くして、其の實行の益非なる更らに人生の悲しみは來る。

乍然、一度、この生存の意義に目醒め、一度この神とし佛としての生活に生きんもの、誰か眞實の自己に生き、誰れか眞實の自由と正義と慈愛とを欲せないものがあらうぞ。所謂、眞、善、美、聖の如來佛の世界は生とし生けるもの、生れなからにして具有せる本然の要求ではないか。如何なる場合にも、我等は眞理の上に立ち、至善、至美の生活にして聖なる御國に生きんことは釋迦、孔子、キリストの望

みばかりでは決してない。

乍然、翻つて、自己の實際生活を思ふ時、誰か一人として此の眞實に生きるものぞ。理想愈高きにかゝらず、實行愈伴はず、茲に於てか我等は第二の理想なる機根相應の宗教を要求せざるを得ぬに至るのである。而してそこに顯れたのが阿彌陀佛の信仰であり、念佛稱名の一路である。そこには如何罪人も、そこには如何なる愚人も、唯ひたすらにすがればよい、すがる外にはすべなき我等、唯絶望の中よりも、すぐはれたいの一つの願いが、如來の救いと呼ぶのである。如何なる時にも、如何なる場合にも、如來は其の機の如何を問はず、「すがるを救ふ」が絶對の本願である。慈悲の救い、救濟の第一義は唯一に如來にすがるとより、眞實最高、最易の方法はない。是時我等は佛を見る。否、常に佛を見るのみでない、是時直に如來の大悲光明に一切を抱いていたゞく所謂、攝取不捨の光明とは即ち是を云ふのである。乍然、此時の見佛は見佛、即信仰であつて、佛を信することの出來る程度に於て佛を見たといふ可きであつて、許よりそれには自己反省と救いを仰く信仰の程度により見佛の深さにも又無量の淺深ありと云ふべきである。然もそれは親といふ救いの親は一人なれど、救いを求むる其の子の心の程度によつて、其の子相應に其の親が見ゆると同様である。

斯くて我等は大悲の如來を中心として、如來の救いを求め、此の救いの中にあつてのみ、眞に永遠の生命と無限の向上とを得るのであるが、乍然、いつまでもかくてあるべきものではない。愈々進んでは益々如來の慈光を辿り、如來の靈格を懂かれては、如來の尊容をも拜せずば更らに止まないものとなる。乍然、何の爲めの尊容ぞや少くとも夫れは其の尊容を通じては如來の大悲にも接し、如來の靈化を蒙ら

んとするの要求に外ならぬ。これ吾人が一面人格的なる如來を拜せんとする所以であつて、一見如來の畫像、木像を拜するが如く見ゆるものも、其の實は是の如來の尊容と人格とに觸れんとする。吾人の要求である。茲に於て吾人の要求は如來の靈界を憶想し、思念し、觀察し、その而影を想ふては眞佛如來の尊容を拜せんと憧憬するに至るのである。是時、秘其の心境は自から如來中心の絶對の中に如來大悲の尊容を憶念して、信仰の對象として見佛の要求となるのである。之を以前に比ぶれば信仰の程度に於て以前に一歩を進めたる境地であつて、以前には只だ救はれたい、助かりたいとのみの自己救濟を主とせしものが、今や救の主たる如來を中心として如來を懂かれ、而して其の救いの主たる如來の靈境をこそ憧憬するに至るのである。これ正に前回に於て私が見佛の要求として述べたる所に當る。

乍然、何の爲めの見佛をや、世には只見佛の爲めの見佛である。その外に何の見佛の目的があらう、恰も戀の爲めの戀である、戀以外に戀の目的はない、戀愛は戀愛にて足れりといふ人のあるやうに、見佛も亦見佛でよい、見佛の外に何の目的があらう、見佛は見佛にて足れりといふ人がないとも限らぬ。乍然、そこにも一つの眞理はある。けれども靜かに本心の要求する所を尋ねて、深く見佛の意義を尋ぬれば、更に吾人の要求は其の御名と尊容とを通して、其の底に滔々として流れて止まざる生ける如來の大靈に觸れるにある。換言すれば我等の理想は其の彌陀の尊容を通じて更らに彌陀の實體に合一し、彌陀同體の妙境に到達しては、如來の理想を自からに實現せんとするにある。乍然、斯の如きの心境は未だ到底見佛の第一歩にては知ること能はざる所であつて、恰も戀愛の奥底に更らに夫れよりも大なる二者人格の抱合があることを知らないと一般である。尤も信仰の幼稚なる時代には神人の關係を主從の關

係と見たり、父子の關係にのみ見る時代もある。乍然、今や私共と生活は主從不二、父子一體の生活より、更らに進んでは神人合一、佛凡不二である。そこには一切の自己を如來に投歸して、餘すところがない。而して一切を如來に投歸すれば一切は悉く如來の世界であり、如來は統攝の主體となる。如來は宇宙唯一の一大圓佛である。

乍然、更らに進んでは、吾人は單なる神人合一、佛凡不二の投歸にて止むものではない。今や進んでは是の妙境より更らに覺佛體現の自覺的一大活現となつて來るのである。即、自らが佛として、又神として、此の土に於ける一切の所作、皆悉く佛作佛行として此の土に實現し來るのである。而て一切をして佛ならしめ、一切をして價值あらしむる處、そこに人類の理想輝き、そこに人類の望み立つのである。

靜かに思へば人はパンのみにて生くるものにあらず、神の心に依つてのみ初めて永劫に生くるものがある。佛の心を離れずば吾等何をか恐るべき、そこには永生の光り輝き、そこには限無き向上の光輝く、吾等は如來と共にして初めて一切は解決す。乍然、不肖道を求め初めてより已に十有八年を過ぐ而て、過にし方を顧みれば轉々感慨に堪えざるものがある。今や我が懐しき父の去りましてより七年を過き、我が慕はしき母の逝きましてより六年を過ぐ、而して我が何よりの恩師として仰いて惜かざる辨榮上人の神去りましてより己に四年の星霜を経た。加之、唯一人の恩師中島百山法主までか此の三月に去り給ふた、此の他が我が親愛なる道友の此の世を去りしものそも幾何ぞや、數へ來れば十百にも及ぶであらう。

而も此の間、靜かに人生の行路を望むれば實に不可思議の世界である。世には未だ一面識もなき人々

が多い、或は舊知の道友も少くない。或は舊友反つて千古の恨を懐くものもあり。或は反て親友となり、或は去つて恨みとなるの人もある。而かも斯くの如くにして、其の日は暮れ、又日々として過ぎて行く、過ぎにし方を望むれば皆人生は夢の如く、幻の如してないか、永かしといへば永かけれど、短かしといへば又短かき此の世、かくて我等の一生は徒らに過んとす。昨日も徒らに暮れぬ、今日も亦徒らに暮れなるとす。一度過ぎてまたと歸らぬ今日の一日、噫、我何を爲すべきぞや。

乍然、翻つて靜かに人生の本義を訪ねて、自己本心の心に歸り、如來大悲の絶對に心を注ぐとき、來るべき人類の理想と自己本心の要求とを喜はずには居られない。永遠の生命と無限向上の世界とは如來を中心として覺佛體現の理想に輝く、人生の前途も亦幸多しといはねばならぬ。

謹んで、我が親愛なる同朋に告ぐ、生存の意義何處にありや。願くは等しく、自己生存の眞義に目醒めて、永遠の生命と無限向上の生活に入り玉へ。そこには己に千古の聖哲、釋迦、孔子、キリストの如きも生きてゐる。吾單にそれらの人々の生活のみではない、一切が不死の世界であり、永遠の世界であり、而して又一切が不生不滅不増不減の世界であり、光りであり、力である。我等前途は理想に輝き、我等の理想は力に輝く、無限の慈愛と喜びと樂しみの望の世界が如來を中心として輝いてゐるのである。而してそこには如何なる罪人も如何なる愚人も等しく許されて、常に向上改善の慈光の友の集りてある。されば我がなつかしき世の人々よ、我等は等しく宇宙の一員として如來の御子として、共に眞生の人とならではないか。(二三、五、十八)。

## 懺悔録

演 阿彌

法身と般若と解脱とに大慈悲光明を輝かし居り給ふ戀しい戀しい私の如來様よ。噫々本當に如來様の御慧は一心に祈り一心に念ずる處に現はれるもので御座います。聲を限りに念佛した爲めに聲は枯れ枯れに咽喉は腫れ痛んで苦しかつたものが五日目の午後にはスツカリ癒つて仕舞つて心持のよい程すこやかに朗らかになつて居りました。此夜は調子に乗つたとても申しませうか、一心に御念佛して居りますと、實に實に驚く可き事實が私の上に現はれつゝある事を發見致しまして殆んど狂喜して仕舞ました。三百日の間明けても暮れても望みに望んで居つた事が破られて然かも夫が豫期せざる處に現はれた其不思議さに何て狂喜せず居られませう。私は驚きました。御念佛が一念一念ハツキリと如來様に向つて放たれ、而して其一つ一つが確かに手ごたへのある事の其の不可思議には驚歎し、狂喜せずには居られませぬ。スツ

スツスツと一念一念如來様へ通ふ此の思掛けなき一大奇蹟を發見した時、我乍ら大歡喜の聲を擧げざるを得ませんでした。歡天喜地とは此の事です。年來の望み否なく絶望して仕舞つた其事が今此處に成就してゐる此の一大事實、何で喜ばずに居られませうか。私の心は躍り私の身體は打ちふるふて居るのでした。

「噫々私は今正に三昧を發得して居るのだ。否な仕懸つて居るのだ。經驗を持つて居る隣のU様に聞いて見様か。御念佛中不意に尋ねるのも變だ。どうも之が段々進んで三昧状態になるのに違ひない。早く聞いて見たいなあ。どうも屹度然様に違ひない。——オヤオヤ。是は又た變だぞ。こんなに雜念が起つて居るのに私の御念佛はちつとも夫に打て合はずに一つ一つ悉く如來様に通つてゐる。あつ。正しく正しく通つてゐる。何と云ふ不思議さであらう。あゝ之は面白い。之は面白い。之は愉快だ。之は愉快だ。おゝ嬉しい。おゝ嬉しい。何と云ふ美妙な嬉しさであらう。おゝおゝ身體も躍つてゐる心も躍つてゐる。あゝ私は今正に

發得して居るのだ。イヤ待てよ。己惚れ過ぎては  
いかぬ。然し嬉しいなあ。嬉しいなあ。……。」  
私はすっかり有頂天になつて居りました。やが  
て御念佛が中止されて禮拜儀になりました。反射  
運動的に禮拜儀を唱和しては居りますが、唯だ聲  
が禮拜儀の文句に代つたと云ふ丈で心は依然とし  
て一念・念はつきりはつきり如來様へ通ふ御念佛  
であります。而して依然として歡喜し踴躍して居  
りました。身心融腋とは此事を云ふのでせうか。  
融け入る様を而して心地の何とも云へない程よい  
温るま湯でサラサラサラと全身が洗はれる様な  
感じ。何と云つてよいでせうか其融け入る靈感  
は實に筆紙のよく及ぶ處でありませぬ。洗身甘露  
水と仰しやつた聖善導の御言葉は全分うなづかれ  
ます。噫々私の全身の汚穢は残りなく今洗ひ流  
されるのではないでせうか。噫私は今正に滅罪さ  
れ今正に更生するのです。嗚呼。微妙なる感じ。  
輕妙なる覺え。神秘の靈感！嗚呼何と云つたら云  
ひ足りるでせう。實に實に天地に滿つる嬉しさで  
御座います。擇法と精進と喜と輕安との四覺支は

茲に同時に私の上に實現されて居ます。而かも一  
念一念正しく通ふ此念佛は正に念覺支の成就では  
ないでせうか。雜念余念か何等の邪魔にならず。  
何等用心する事なくて平かに念佛してゐる處。正  
に捨の姿では無いでせうか。元來七覺支は時代時  
代に區分して覺に至る道程を示めずものでせうけ  
れども一念の中にもはつきり同時に具足する事も  
出来るものと思ひます。よし此經驗が淺墓なも  
のでありまして私の宗教的情操が之に依つて確  
立し之に依つて將來の行動を價値付け得るもので  
あるならば「覺支」でなくて何でせう。免に角私は  
嬉しくてならんのでした。其内にまた御念佛にな  
りました。私の精神状態は少しも變化しないで唯  
だ段々深く成り行く事を覺ゆるのみであります。  
暫くする内ふ顔を見て見たい様な氣がして三  
昧佛の方を見るときもなしに見ると、燭臺や香爐や  
などが悉く燦爛たる光明を發して居る。馬鹿など  
思つて再び眼をつむりましたが、何だか氣になる  
のでまた顔を揚げると矢張り凡ての物から光明が  
迸ばしつてゐます。すると更に精神が一層スーッ

と集中したかと思ふと三昧佛は前方に浮き出し而  
して表装は無くなつて唯だ華やかなる五彩の雲中  
に内外透徹したる眞金色身、相好端正に威神極ま  
りなく神聖にして而かも美妙に、何と云つて形容  
しませうか、唯だ美しく唯だ心地よく、未だ嘗つ  
て見た事もなく聞いた事もない内外透徹の美しき  
色に見惚れて暫くは夫れに享樂して居りました。  
自分を忘れて享樂して居りました。

「馬鹿野郎！」

何處かで其塵な心が首を出さうとして居りまし  
た時上人とU様との方に二條の白道のあるのがフ  
ト目に這入りました。

「ハテナ。何だらう。何處からか知ら？」

一寸目をそらすと東御所間に飾つてあつた先師  
の位牌の前の蠟燭がゆらめいて見えました。

U様はまたU様で何か知らずなりに私の顔を覗い  
てゐられるのです。かまつては居られないとは思  
ひ乍らも何だか氣にもかゝります。また再び透き  
通つてゐる御佛の姿に享樂心を満足させて居りま  
すと、不圖氣がつきました。

「あつ。影に捉はれて居る。形像に執着してゐる  
そんな事では駄目だ。馬鹿野郎。」

輕い驚きですがこんな考が起つて眼をつむり而  
して頻りに後悔し初めました。すると精神の状態  
は漸々に元へ戻つて二三分の後には身心融腋の感  
も無くなり御念佛も力弱きものとなつて仕舞まし  
たので、「しまつたッ。」と叫び乍ら三度顔を上げ  
て見ますと、また凡ての物から光明を發して居り  
ます。然し乍ら私はかう云ふ事が目的で御念佛し  
て居るのではありません事を反省して更に瞑目し  
つつ御念佛を一心に續けましたが、どうも己前程  
しつくりした御念佛になりません。更に後悔を重  
ね乍ら一生懸命に申して居りますと金色の杉の木  
の様なものが高低幾つとなく見えるのでした。間  
もなく御念佛は終りになりました。私はすっかり  
後悔して仕舞つて庫裡にさがると直ぐ上人に  
「三つの障がありました。止むを得ません。此の  
障の爲に私の發得は延期されて仕舞ました。」とん  
な障りがありましたか。」

私は簡単に當夜の念佛實感を申し上げました。

「イヤ。形に捉はれて居ては駄目だと氣の付いたと云ふ事は尊い事です。夫は大なる收獲です。」と上人は慰めて下さいました。私は氣を落しはしませんでしたけれども、或る淋しさが無いでもありません。然しどちらかと云へば夫はもう嬉しさで一杯ではあつたので御座います。

「何に之からだ。」

噫々。私は生れ更つたのです、正しく生れ更つたのです。一時間前の私と今の私とはもう身體も心も變つて仕舞つたのです。少くとも自己改造の根底を握つたのです。今日唯今から決然たる意志の人となつたのです。而してもう有限を思ひ切つたのです。嗚呼。信仰とは此事であつたのでした自分に出来なかつた自己改造の大事業が如來様に依つてなされる事を自分に知つた此の事實が信仰其物であつたのでした。信仰とは主觀でも客觀でもないのです。唯だ此情意の上に行はるゝ當面の事實なのです。噫々私は何と云ふ幸せ者でせう。唯今こそ正態の信仰を握かんのです。

「演さんは今の御念佛で一聲毎に佛様を口から出

しくてなりません。隔生の感とは此事でせうか。夜も嬉しくて嬉しく寝られますん。何だか私丈が撰ばれた者の様に思はれて

「我れ世に勝てり」

の感は實際人事でなく心ひそかに私を微笑ましますのです。噫々嬉しい人生よ。

## 借金してゐる心もち(二)

中野 尅 子

信仰の進みの楷梯に於て心の落付き方に三通りあると云つた其第一は、全くの懷疑時代で、人が信仰だ宗教だなんて騒いでゐるのを見ると馬鹿らしくして仕様が無い。

一帯信仰があるなんて云てる奴は有りもせぬ罪をある様に思込んで了て、やれ是れでは助からぬの此れで助かつたのと、夫れから夫れへと迷ひ込んでる奴の事だ、一種の變態心理で、救はれたと思つてゐる奴も、まだ救ひに預て居らぬと嘆いてゐる奴も、自分に好きで紙袋を被つて騒いでゐる猫

し居た。」

振返つて見るとU様が誰かに話してゐるのでした。「イエ夫が失敗したのでです。」

「失敗しても擇法が出来たのだからいい。」

U様も亦たかう云つて慰めて呉れるのでした。

「之からだ。之から本當になるのだ。」

元來私達は如來様に迄還元すればもう問題は無いのですけれども、今迄大に歪みに歪み穢れに穢れて來て居るので、其處に矛盾を感じ其處に藻掻きを持つて居るので御座いませう。理屈は兎に角私達は今現に素直にも成り切れず悪い心の數々を所有して居り而して随分醜い事も仕馴れて來て居りますにも係らず、唯だ客觀的に斗りよくならうとして居つた事は所謂滑の稽なるもので御座いました。今其處に氣づき其處に目醒め其處に仕合せんと思ふ此心は如來様よ。アナタの御心の一分を今初めて僅かに知り得たからなので御座います。然様です。私は之から本當の人間に一步づゝ一步づゝなつて行くのです。私は本當に身が引締まる程の決心を感得致します。而して何だか無性に嬉

と一緒だ、須らく達觀して見ろ悪が何處に在る、罪が何處に在る、又罪の罪たるものは佛に願つたつて消えるものでない、消やし得る神なんて有りやしない、赦して呉れなんて狡猾るい根性が仰々間違てゐるのだ、犯かした罪なら何故男らしく受けんのかい、一體女の腐つた様な奴ばかりが信仰テナ隠れ場へ逃げ込むのだ、白晝大道の眞中で佛と引組む位いの氣慨がなきや本當の人間でない。此意味に於て宗教を破り宗教を超えたる者のみか本當の人間だ、若し佛と云ふ者があるなら斯る眞人をこそ救ふだらう、盲目たる信者らしい顔をしてる奴は却て地獄行きだ——と多くの人は言ひます、いや私もそう我嗚り廻して來だ。そして斯う考へてゐた、悪い事だと考へてゐた事が本當に悪だつたらうか、それが應て好結果を生むた事は幾らもある、其刹那悪いと自分に感じた丈けの事でも第三者から見れば實は善であつたかも知れぬ。善なる眞相を見透す事が出来なくて我々が自分の小智で悪と誤辨し一人苦勞をしてゐるのだ、それを反對に善だと思つて悪をしてる事もある。要する

に人間の凡慮で勝手に決めてゐるのだ、總ては成る様にしきやならぬ事實の連續のみだ、善だ悪だとかは假りに名けた區別に過ぎぬ、其塵煩鎖から出で、事實そのものに生きよ、迷も無く悟も無く唯だ生の進展のみあるのみだと達觀して來た、然れど皆がそう云つて各々勝手計り振舞つては秩序が無くなるから一時的に道徳とか法律とか云ふものが置かれてゐる。實に低級なものだがまあお互の幸福の爲めに懸らく守てゆかねばならん、そうすると道徳的にも疚しいと思ふ事を時々不意不意とする、すれば制裁も受ける良心の呵責も感ずるけれど愚劣な事だ、制裁を受けたつて戻る譯でなし後悔したつて事實は既に進んでゐる。唯だ斯る場合にせめてもの慰安として人間には懺悔と云ふ道が惠まれてゐる、此ふ矛盾を切抜ける爲めに安全辨だ。然れどそれも佛や神に向て懺悔するのでない、神や佛に付うして俺の行爲を宥したり罰したりする權威がある、たゞ俺が俺に向て僅かに済まなんだと膽に銘ずる丈けの事だ、そして自らに悔ひて次に斯る馬鹿氣だ陥穽に落ち込まぬ事だ

金返へすのも自己の力以外何物も無い、自分が最大尊嚴で我そのものが佛とも神とも謂はる可きものである。そして其自己の尊嚴を捉へたとき悟りであり、今迄煩悶してゐた事が一切迷ひであつた事に氣が附く、そして自分で自分を淨めてゆく自淨其意の生活が初まる。然しよく考へて見ねばならぬ。自己に誓ひ自己に頼んでゐるが其自己こそは世間の愚者共が有難がつて擔いてゐる佛や神とかと餘り大差は無いぢやないか、低級な迷ひをぶち破つて來たものの稍高尚な概念の中に潜つてゐる、自我と云ふ大な迷ひの中に酔てゐる、その自我が何だ、と突込まれる。とすぐ氣がつく、本當の悟た瞬間には其自我も無い唯空々漠々平々坦々で虚心平氣、止まらうとして留まり動かうとして搖ぐばかり去來を天地宇宙と共にして心を滅し無我なる處即ち絶對だとする、勿論懺悔も反省もいらぬ願求も悦びも無い、無味無臭でたゞ自然そのものである。然し其者一個人は悟り澄ませば野が山となつて頭の上から崩れ落ちて來やうが平氣であらうが、周圍の世界はそれで濟まうか、茲が第

即ち自己への祈りである。此れが宗教と名のつくものなら私の宗教だと思つてゐた。即ち私の借金の例で云ふと自分の借りた金は自分で返さうと常に思つてゐた、そして友だちが代て返してやると云ふと却て内心では癪に障てゐた位です、心からの同情で云て呉れるのであらうが俺は同情に生きる者でない、もし彼の言に従ふなら自分を殺すものだ、さなきだに自分で借金を返済したつて既に貸して貰つた好意の返済は永遠に果し得ぬと思つてゐる位いだ、それに又今友の好意を借りると云ふ事は忍び得ない苦痛である。それで自分の負目は自分で解くと云ふ主義である。爰まで信じて來て居れる人は實に尊い事です、確に安價な信仰に酔てゐる奴原は此の堅固心に向ては一言も無からうと思ひます。然しよく考へねば要かぬ、ものは常に兩面から觀る事を怠てはならぬ。此考へは謂はば自力の信仰である、自己以外に自己を知つたものは無く、泣言を持ち掛けでゆく佛とか神とか云ふものを要せない、自分を叱るものも自分を慰めるものも自分である、借

二革命の起點である。自分一個の内界丈けは悟り切て了へばそれで安心である。而し借金を返さうと思つてゐるが返せぬから致方がない、是れ宇宙自然の成行きだと澄して居れるか付うか、一方返したいと云ふ希望の消えぬ限り返へせぬ現實の悲哀が伴はねばならぬ、自分一人丈けの利己に生きるのなら悟ても悟らなくても大差はない、他人をも満足させたいのが眞に自己の満足だと思ふとき初めて煩悶が來る。外界と調和し乍ら内界の満足を得んとする處に眞實の道がある。獨覺羅漢は云はずもがな唯だ自己の如き高き悟りに他をも入れしめたいと云ふ丈けの同情なら矢張り自利羅漢道だ金は返したいが力が無いと云ふ其處に眞實の惱みがある。頼んでゐた自己の崩壊がある。本當に自力を突詰めなければ他力は啓けぬ、自力の奥に他力があり自力の山より他力の山はまだ峻しい、此二山を超えた時初めて救濟の靈光燦々として降り天朗かに地寛ろく、救のみ親は眼前に立て在す、即ち此第一の時代は自己内觀にのみ生きて益々奥へ奥へと掘て行て自分外を注意せなかつた自力

信仰の時代である、自分に金を返したい返したいと計り思てゐて友の心配してゐる心持を考へてやる暇の無かつた時代である。友の自由意志をも自分で辭つて好意をも拒んでゐる情態である、他心他力と云ふ事には少しも考へず此意味に於て他力的には求道の時代へも這入らず、全く自力で自分の臍の上へばかり突いてゐる姿である。斯くして次にもつと微妙複雑な他力の世界が来る。(續く)

### 編輯餘白

大野顯道

深く佛の本願を信じて南無阿彌陀佛と申すところに信仰がある筈である。信仰は概念の遊戯でもないければ單なる思想生活でもない佛に歸命し佛の統攝の中に生きる生活の實際でなければならぬ信仰が生命の問題であり事實の問題であると云ふ事は知り過ぎてゐて反て勘違し易い、佛を自分の生活の説明にしたり未だ佛が信せられてゐないのに佛を安價に持廻らふとするのである。佛は自分の何よりも一番親しい、そして如何な

業を通して現れて下さつたのであつた、佛が實在は肯定しても左程佛の必要を感じなかつた自分が思想的破綻、現實的行詰りに遇ひ乍らも一方憧れの世界を深く求めて止まぬ矛盾の自己の行き着くところは温き母親の胸より外はなかつたのである、そして初めて開けて行く宿願力の大道に歸入するのみであつたのだ、かくして「佛在さざるべからず」と信じ得らるゝに至つた時は前より一層深く佛の本願が自分に生きて來たのである、恰も子供の行儀作法に對する他人の月並的な賞讃よりも母親の叱咤の中に光つてゐる慈悲が一層小供の上に強く本願が現はれてゐる様に。

私等の主觀的生活の中へ積極的な精進が生れて來る時佛の本願の偉大さを事實の上に味はさせられるのである、佛本願の現れは我々の最も身近かな所にあすの私共の生きる途上に(五・三〇)

▽尅兄の愛の園圖書館も去月二十日から開かれました集ひ寄る多くの人々がこの愛の滴をなめた時兄の努力が光つて居る様です

る場合もその時處位を問はず自分の味方であつて呉れる而も又一面には厳し過ぎる程犯し難い嚴然たるものがある

十劫の昔法藏菩薩が因位の時世自在王佛のみ前で二百一十億、世界の中から選びに選ばれた彌陀の國土は四十八の本願所成の聖淨なみ國であつた、彌陀の聖旨はこの本願にあり且つその表現は嚴淨の國土の上に輝いてゐるのである即ち常樂の世界は本願そのものに外ならぬ

今私共の生活の上に私共の生きてゐる現實の上にはこの本願が幾何生き幾何味へてゐるかを反省して見たい、只華かな夢の世界の莊嚴として見流すには余りに偉大であり不可思議に私共の自然は成り立つてゐる

双葉の葉末に宿る滴の中にも嚴肅な如來の實相の輝きが拜まるゝ時自分の心は我知らず清められる、未だ佛を信ずる事の出來なかつた時にも佛を否定するだけの勇氣はなかつた「佛在ます」と云ふ信の芽生えた時それは小さな自分の力で知つたのではなかつた、佛本願の廻向力が私の上に私の宿

▽内容の充實の爲めに今月は思ひ切つて紙数を増す事に致しました

振替口座東京四七五八八番眞生社  
大正十一年二月二日第三種郵便物認可  
大正十二年六月一日發行毎月一回一日發行  
定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯兼 土屋 觀道  
發行人

東京市神田區駿河臺袋町一番地  
發行所 眞生社

東京市外西巢鴨町二七一二番地  
印刷所 原 子 廣 宣

東京市外西巢鴨町二七一二番地  
印刷所 無我山房印刷工場

